

第59回日本泌尿器科学会群馬地方会演題抄録

日 時：平成 23 年 11 月 12 日 (土) 15 時 00~
場 所：群馬大学医学部内 刀城会館
会 長：小林 幹男 (伊勢崎市民病院)
事務局：柴田 康博 (群馬大院・医・泌尿器科学)

〈セッション I〉

座長：新田 貴士 (群馬大院・医・泌尿器科学)

臨床症例

1. 巨大骨盤内腫瘍

坂本亮一郎, 柏木 文蔵, 黒川 公平
(国立病院機構高崎総合医療センター
泌尿器科)
瑞慶覧美穂, 片貝 栄樹, 伊藤 郁朗
(同 産婦人科)
坂元 一郎 (同 外科)

症例は 60 歳, 女性. 1 年前より, 下腹部膨隆を自覚していた. 最近, 下腹部膨隆精査のため近医受診した. この際, 卵巣腫瘍疑いおよびその脱出による左鼠径ヘルニアを指摘された. 当院婦人科紹介され精査となった. CT にて巨大骨盤内腫瘍およびそれによる左鼠径ヘルニアの診断となった. 経腔的な吸引細胞診は腫瘍細胞無し. その後, 経会陰的腫瘍針生検施行したが平滑筋細胞のみであった. FDG-PET/CT は FDG の取り込み無く悪性は否定的であった.

低悪性度脂肪肉腫疑いにて, 泌尿器科を主体に婦人科の応援, 外科の待機のもと手術施行. 腹膜外内アプローチにて腫瘍摘出に加え子宮および両付属器合併切除を行った. 腫瘍は 1.8kg, 組織は血管筋脂肪腫であった. 若干の文献的考察を加え報告した.

2. 馬蹄腎に生じた腎カルチノイドの一例

悦永 徹, 富田 健介, 齊藤 佳隆
内田 達也, 竹沢 豊, 小林 幹男
(伊勢崎市民病院 泌尿器科)

【症 例】 35 歳男性. 他院で尿膜管膿瘍経過観察中に CT で偶然馬蹄腎および右腎腫瘍, 腎門部リンパ節腫大を指摘され 2011 年 5 月当科紹介初診. 右腎腫瘍リンパ節転移の診断で同年 6 月右腎摘出術, 腎門部リンパ節郭

清, 尿膜管膿瘍切除術を施行した. 病理は腎カルチノイドであった. 腎門部リンパ節および尿膜管には悪性所見を認めなかった. 現時点で再発は認めていない. 【考察】 カルチノイドは神経内分泌細胞由来で消化管に好発し, 腎原発は稀である. リンパ節以外の有転移症例では予後不良とされている. 欧米での報告では馬蹄腎合併例が散見される. 有効とされる後療法はなく, 今後厳重な経過観察を行う予定である.

3. Paclitaxel, Cisplatin, 5-FU による化学療法が奏功した陰茎癌の一例

鈴木 智美, 加藤 春雄, 中嶋 仁
藤塚 雄司, 周東 孝浩, 新田 貴士
古谷 洋介, 宮久保真意, 森川 泰如
関根 芳岳, 野村 昌史, 小池 秀和
松井 博, 柴田 康博, 羽鳥 基明
伊藤 一人, 鈴木 和浩

(群馬大院・医・泌尿器科学)

症例は 68 歳男性. 2008 年より陰茎癌を指摘されていたが未治療. 2011 年 4 月, 腫瘤増大あり前医受診し, 多発リンパ節転移, 肺転移を指摘され, 加療目的に当科紹介受診. 同年 6 月, 陰茎全摘, 右鼠径リンパ節郭清施行. 病理解剖的診断は中分化型扁平上皮癌 (pT3N3M1, stage IV) であった. 同年 7 月より Paclitaxel, Cisplatin, 5-FU による化学療法 3 コース施行. 縮小率 68% と, 高い奏功が得られた. 転移性陰茎癌に対する化学療法は確立されておらず, 本レジメは新しい治療として期待される.

4. 長期透析患者に発生した非外傷性腎周囲血腫の 1 例

宮澤 慶行, 井上 雅晴, 大竹 伸明
関原 哲夫 (日高病院 泌尿器科)

症例は 72 歳男性. 2000 年に糖尿病性腎症による末期腎不全の診断で血液透析導入され, 10 年の透析歴あり. 2002 年, 二次性副甲状腺機能亢進症の診断で副甲状腺摘出術施行. 内シャント血流障害の診断で, 複数回にわたる PTA 歴あり, バイアスピリンを内服していた. 透析開